

2016年
7月6日
水曜日

本郷 亮 教授（経済学史）

わが座右の書 — 聖書と史記 —

ここで言う「座右の書」とは、単なる愛読書ではなく、生きるなかで悩みや怖れにぶつかったときに手に取る「人生の指南書」であり、いわば、いざという時の相談相手、助言者、さらには人生の師でもある。

皆さんにはそのような本がありませんか？おそろくないでしょうか。私も20才頃には、愛読書はありました。が、座右の書は定まっていまいませんでした。一般にその年頃の若者というのは、まさに「可能性のかたまり」であり、努力次第では人生の可能性はほとんど無限大です。関学生ならば、なおさらです。すなわち皆さんは、人生の激動期・成長期の真っただ中で、己の生き方を暗中模索している。今は、座右の書を定めるところか、むしろ「何か」を探し求めている時期じゃないでしょうか？40代半ばを生きている今の私の座

右の書は、「聖書」、司馬遷「史記」、「孫子」の三冊です。しかし孫子は、生き方の手本を示すというより、戦略・現実的に振る舞わねばならぬときの必勝本にすぎないので、本日は割愛します。ちなみに孫子は、1回読むくらいでは分からないでしょうが、かなり恐ろしい本ですよ。その裏表のリアリズムは、マキアベツリなんぞと比べものになりません。一方、聖書と史記は、人生の哲学や具体的モデル（模範）を提供してくれます。どちらもざっと2千年前の本。前者は西洋の、後者は東洋の、理想や典型を示すものです。私はときどき研究のために外国に単身赴くことがあります。恥ずかしながら、いつも強度の不安・ストレスに苦しみます。スーツケースの片隅に、聖書（関学経済の学生時代から使っているのでポロポロ）や史記の

適当な一巻を入れるのを忘れません。ホテルの自室で目を閉じて聖書に手を置くだけで、覚悟・方向性が定まるからです。原点を思い出させてくれるのですね。こないだ学会報告で渡米したときも同様でした。

科学の時代において、神や来世を信じるのは至難です。私はクリスチャンですが、「来世を信じるか？」と問われれば、「存在しないかもしれない」と弱々しく答えるでしょう。「死者の蘇りを信じるか？」と問われれば、「医学上不可能」と答えるのをええない！それでも私は、よく分からないが、それらの存在を心から「願う」「待望し」「祈り」ます。100%の信仰を保てるのはイエス・キリストのみ。人間の心には大なり小なり疑いがある。私は信仰へのポジティブな姿勢（感謝の念など）さえ常に保っていれば、

それで良いと考えています。皆さんは宗教をどう考えますか？

史記も、（聖書とはかなり異なる意味で）わが人生の師であり、そこから受けた大小の影響は数えきれませんが、同書の話の多くはドラマティック、かつ登場人物もやたらとカッコイイので、知らぬまに感化されてしまった気がします。中国古典は予備知識がないと難しいので、最初の入門書として直木賞作家・陳舜臣の『小説十八史略』を薦めたい（全3巻・関学図書館にあり）。中国古典全般の教養を効率的に得られるうえに、超弩級の面白さですよ。

学問とは、単なる就職対策ではありません。一生のものでもありません。皆さんが座右の書とめぐり会いますように。